

室町時代におけるシク活用形容詞に関する考察

于艶麗

——合形容詞の語構成を中心に——

一 はじめに

日本語の歴史において、古代から近代へ推移する過渡期に当り、古代語の継承と近代語の生成発展という二面が交錯して複雑な様相を呈しつつ、次第に近代語の輪郭を現すに至るのが室町期である。『時代別国語大辞典（室町時代編）』に収録されているシク活用形容詞が四八四語であり、『時代別国語大辞典（上代編）』に収録されている一四一語の3倍以上になっている。そのうち、七六語が上代編にも見出し語として収録されているから、およそ四〇〇語のシク活用形容詞が新出語であることになる。そこで、これらの語が、語構成上に、どのような特徴を持っているのか、考察してみたいと思う。調査した資料にシク活用形容詞の収録語数（見出し語のみ）は次の通りである。

『万葉集』八六語

『時代別国語大辞典（上代編）』一四一語

『日葡辞書』二二二語

『時代別国語大辞典（室町時代編）』四八四語
『大辞林』（第二版）三九六語
『日本国語大辞典』八九六語

本稿は、主に『時代別国語大辞典（室町時代編）』に収録されているシク活用形容詞四八四語を対象として、上代と比較しながら、室町時代におけるシク活用形容詞の語構成変化について考察する。

二 重ね形をとる語幹

『上代シク活用形容詞に関する考察』（注1）で考察したように、上代では、「トホトホシ・ナガナガシ・タヅタヅシ・オホホシ」など、形容詞語幹や擬声語を重ねた形を語幹とするシク活用形容詞がいくつか見られた。実は、このような造語法は、さらに範囲を広げて次の時期に持ち越され、現在までもその命脈を保っている。

機能としては、重ね形を語幹とするものは、状態の表現と情意の強調

と二つの面から考えられる。「タギタギシ」は前者であり、凹凸・高低・深淺のある状態をいう。「トホトホシ・ナガナガシ」は後者であり、主観的な感情あるいは心理状態を表現できる。たとえば、「ナガシ」のもつ客観性に対して、「ナガナガシ」は主観において必要以上に長いと判断する気持を表す。また、単なる「トホシ」に対して、「トホトホシ」はその距離を感嘆をもって眺めたりする心理状態を伴ったものであるう（注2）。『時代別国語大辞典（上代編）』の見出し語の中で、このような造語法を用いるシク活用形容詞は一八語である。さらにこの一八語の語幹について詳しく分析してみると、次のように分けられる。

A 擬声語 きらきらし こごし

「きらきらし」の「キラ」は情態的意義をもった擬声語である。「こごし」の「ゴ」は重複によって構成された擬声語である。

B 形容詞語幹あるいは形容詞的意味要素を持つもの

いつつし おどろおどろし おほほし くだくだし くまくまし すがすがし（そがそがし） たぎたぎし とほとほし ながながし をさをさし

「イツ・オドロ・クダ・クマ・スガ・トホ・ナガ・ヲサ」はそれぞれ「厳・驚・細碎・隈・清・遠・長・長」と漢字で表記でき、また「オホシ」「タギシ」という形容詞の存在が推測できるため、「おほほし」と「たぎたぎし」もこの種類に分類した。

C 動詞連用形 わきわきし

「ワキ」は動詞「別ク」の連用形である。

D 名詞 うやうやし たづたづし ひねひねし ゆゆし ををし

「エヤ・ヒネ・ユ・ヲ」はそれぞれ「礼・古／干稲（倉に積みあげて古くなった稲をヒネといったかもしれない）・斎・雄」である。また、上代編に見出し語として収録されていないが、同じ構成を持つ形容詞に「めめし」もあると思われる。「うやなし（無礼）」「たづがなし」という語の存在によって、「たづたづし」をこの種類に分類した。

『時代別国語大辞典（室町時代編）』に収録されている重ねた形を語幹とするシク活用形容詞は九七語である（注3）。そのうち、上代編にもその存在が確認できるのは一〇語である。上代編と比べてみると、重ね形を語幹とするものの割合が大きくなっている（上代十二・八％↓室町二〇・〇％）。そして、新出語のうち、形容詞語幹と名詞を重ねて語幹とするのが多く占めている（表1を参照）。

	A	B	C	D	?
構成	上代編（一八語）	形容詞語幹	動詞連用形	名詞	未定
擬声語	二語	一〇語	一語	五語	—
一語	室町時代編（九七語）	三八語	六語	四〇語	一二語

三 接尾辞

古代日本語の形容詞は、形態的特徴によってク活用とシク活用の二つのグループに分けられる。語幹からみると、ク活用形容詞は、外形的・状態的属性を表す語幹にシがついたものが多く、シク活用形容詞は、情意を表す語幹にシのついたものが多いと考えられる。

ク活用

赤・熱・厚・青・薄・遅・多・重・堅・軽・黒・狭・寒・茂・
白・長・柔・早・広・深・太・古・細・短・安・弱・若
など

シク活用

あから あたら いきどほろ いぶか かな くや くる こほ とも なつか わび
懇・惜・憤・訝・愛・悔・苦・恋・羨・懷・侘
など

上代シク活用形容詞の語構成は、主に次の二点に絞られる。一つは、語幹に接尾辞「シ」がついた単純形容詞が多い。これと関連して動詞と同源であるものも多い(二三語)。もう一つは、「うたがはし」のように動詞からの派生形容詞が非常に多く見られる(四二語)。後世によく見られる接尾辞による合成形容詞は極めて少ない。

『時代別国語大辞典(上代編)』収録語の中で、「うらぐはし・かくは

し・なぐはし・はなぐはし・まぐはし・きほし・みがほし・みほし」のように、後ろに「くはし」「ほし」が接続する語が見られたが、「ほし」は現代語助動詞「たい」に相当して、接尾辞とは性質が異なっている。「くはし」は美妙・美麗・楽の意で、すべて美的な快感をおぼえたものについていう語であり、接尾辞の性質を帯びるものの、実質的な意味がやや強い、そして、後世にはその影響が及ばない。また、「ぐまし」と「がはし」は接尾辞であるが、「なみだぐまし」と「みだりがはし」のそれぞれ一語だけであった。要するに、上代シク活用形容詞の語構成に関しては、接尾辞の存在感が非常に薄いようである。

これに対して、室町時代シク活用形容詞の語構成の中で、接尾辞による造語は大きな割合を占めている。「がまし」「らし」「がはし」「めかし」「らかし」などの接尾辞を用いる語は九一語である(注4)。そして、それ以降「がまし」や「らし」がさらに発展して、「くろし」「たらし」のような活発な造語力を持つ接尾辞も現れ始める。『日本国語大辞典』に収録されている接尾辞を用いる語はおよそ三二四語で、語数を比べると、次の通りである(表2を参照)。

日国	室町	上代					
八五	五〇	一	がまし	がはし	くろし	たらし	めかし
四	四	一					らかし
二二	一	一					らし
四五	六	一					
九	二	一					
三	二九	一					
一六一							

四 その他の合形成容詞

『時代別国語大辞典（上代編）』に収録されているシク活用形容詞の中で、合形成容詞（動詞の派生形容詞を除く）は一八語である。そして、ク活用形容詞と比べると、「うら・おもひ・こころ・くはし・ほし」など、組み立てに用いる語がより集中している。構造も「名詞＋形容詞」と「動詞連用形＋形容詞」の二種類に分けられる。

うら（4語）	うらがなし・うらがはし・うらごひし・うらごほし
おもひ（2語）	おもひがなし・おもひぐるし
こころ（3語）	こころがなし・こころぐるし・こころごひし
くはし（4語）	かくはし・なぐはし・はなぐはし・まぐはし
ほし（3語）	きほし・みがほし・みほし
もの（2語）	ものかなし・ものごひし

『時代別国語大辞典（室町時代編）』に収録されているシク活用形容詞四八四語のうち、接尾辞による合形成容詞及び動詞による派生形容詞を除くと、その他の合形成容詞はおよそ七〇語である。上代編にも見出し語として収録されているのはわずか四語である。構造からみると、次のことがわかる。（表3を参照）。

- A 「名詞＋形容詞」がさらに範囲を拡げて用いられた（三五語）。
- B 「形容詞＋形容詞」が現れ始めた（四語）。
- C 「動詞連用形＋形容詞」がまだ数少ない（六語）。
- D 「接頭辞（あるいはそれに相当するもの）＋形容詞」が多く出現している（二四語）。

特に、上代に比べて、接頭辞あるいはよく用いる名詞など、合形成容詞の構成成分がより豊かになっている。

上代	四語	二語	三語	二語
室町	三語	一語	六語	四語
			二語	三語
			七語	九語
			二語	

また、室町時代以降も「こ」「もの」などの接頭語がさらに多く用いられ、「いけ」「くそ」などの新しい接頭語も現れはじめた。ちなみに、『日本国語大辞典』における「くしい型」形容詞が用いる接頭語は次のようである。

「あい」二語	「いけ」六語	「うそ」三語	「くそ」二語	「け」一語
「けち」一語	「こ」二〇語	「しち」二語	「しゃ」一語	「しよ」一語
「す」一語	「そら」一語	「ど」一語	「なま」四語	「ひち」一語
「もの」一四語				

五 終わりに

上代シク活用形容詞は あから あたら いきどほろ いぶか かな くや くる こほ とも 懇・惜・憤・訝・愛・悔・苦・恋・羨・

なつか わび 懐・侘 などの情意的意味要素を基本として、同じ形状言を用いるク

活用形容詞、形容動詞、動詞と意味の上で深く関わっている。これに対して、室町時代においては、重ねた形を語幹とする造語法が広く行われ、より多くの語彙が作られて、さらに、接頭辞と接尾辞の発展によって、大量な合成形容詞が現れた。上代と比べて、室町時代にはシク活用形容詞の語構成に大きな変化が見られるのである。また、重ね形をとるものの中で、「こととし」「ものものし」のような、名詞を重ねたものも多くなってきたことや、「がまし」と「らし」などの客観的意味要素を持つ接尾辞の多用や、「いや」「うそ」「こ」など程度や評価の意味要素を持つ接頭辞の出現及び複合形容詞の中に「こと」「ひと」などの「名詞＋形容詞」構造の増加などから見ると、シク活用形容詞の客観的あるいは評価的要素が重くなってくると考えられる。上代以降に活用と情意性の対応関係が緩和されているといわれるのも、こういう語構成の変化と関係があると思われる。

注 1 立教大学大学院 日本文学論叢(第九号) 二〇〇九年八月

注 2 例(1)「あしひきの山鳥の尾の長永夜をひとりかもねむ」

(万二八〇二)

例(2)「八千矛の神の命は八島国妻枕きかねて登富登富斯高志の国に賢し女を有りと聞かして」(記神代)

注 3 「ぎやうぎやうし・げうげうし・げふげふし・ばばし・

いまいまはし・かろがろし」の六語を除く。

注 4 「あいさうらし・いまめかはし・おおそれがまし・げふらし・じつらし・せからしい」の六語を除く。

(う えんれい 大学院後期課程在学生)

表1	室町時代編・重ねた形を語幹とするシク活用形容詞（97語）									
D	あいあいし	愛愛し	14C前		B	せばせばし	狹狹し			
B	あかあかし	赤赤し			D	そうぞうし	恣恣し	室町末		
B	あさあさし	浅浅し	1254		D	そばそばし	蕎蕎し			
B	あさあざし	鮮鮮し			B	たけだけし	猛猛し	1283		
?	あたあたし				B	たづたづし			*	
D	あだあだし	徒徒し			?	たどたどし		10C後		
C	あてあてし	当当し			B	ちかちかし	近近し	1216頃か		
B	あらあらし	荒荒し	970-999頃		D	てふてふし	喋喋し	1694		
B	あらあらし	粗粗し			?	つべつべし				
C	ありありし	在在し			?	てばてばし		1430		
B	あはあはし	淡淡し	970-999頃		D	どくどくし	毒毒し	1813		
B	いかいかし	嚴嚴し			B	とほどほし	遠遠し		*	
D	いしいし	以次以次し			B	ながながし	長長し	8C後	*	
B	いたいたし	痛痛し	13C初		B	なまなまし	生なまし	947-957頃		
C	いまいまし	忌忌し	1001-14頃		B	なれなれし	馴馴し	970-999頃		
?	いみいみし				B	にがにがし	苦苦し	13C前		
D	いよいよし	弥し			B	にぎにぎし	賑賑し	1510-50		
D	いらいらし	苽苽し	1177-81		D	のろのろし	呪呪し			
D	うひうひし	初初し	10C終		C	はえはえし	映映し			
?	うかうかし				?	はかばかし		970-999頃		
D	うつうつし	鬱鬱し			C	ばけばけし	化化し	1477		
B	うとうとし	疎疎し	970-999頃		D	はなばなし	花花し	12C後か		
D	うやうやし	恭し	762	*	B	はやばやし	早早し	9C末-10C初		
D	うらうらし				D	はればれし	晴晴し	10C終		
D	をこをこし	痴痴し			D	ひとびとし	人人し			
B	をさをさし	長長し		*	D	びびし	美美し	974頃		
B	おどろおどろし			*	B	ふかふかし	深深し	1603-04		
?	おめおめし				D	ふくふくし	福福し	1264-88頃		
B	おもおもし	重重し	10C後		D	ほねほねし	骨骨し	1563		
D	かひがひし	甲斐甲斐し	1001-14頃		C	ほれほれし	惚惚し			
D	かうがうし	神神し			?	まがまがし				
D	かどかどし	角角し	1140頃		?	まめまめし		970-999頃		
B	かるがるし	輕輕し	720		D	みこみこし	神子神子し			
D	きはきはし	際際し	1917		D	ものものし	物物し	970-999頃		
A	きらきらし	煌煌し		*	D	やつやつし	寢寢しい	1177-81		
D	くせぐせし	曲曲し			D	ゆめゆめし	夢夢し	1708頃		
B	くだくだし		720	*	D	ゆゆし	忌忌し	712	*	
?	くどくどし		1901		D	ゆゑゆゑし	故故し			
B	くまぐまし	隈隈し		*	D	よしよしし	由由し			
B	くやくやし				D	よそよそし	余所余所し	1069 77頃か		
?	くれぐれし	呉呉し			B	よわよわし	弱弱し	1216頃か		
B	けけし				D	らうらうし	良良し			
D	げすげすし	下衆下衆し			D	りりし		1275		
D	げにげにし	実実し								
D	ことことし	事事し	905 914							
B	こはごはし	強強し								
B	こまごまし	細細し	1603 04							
B	さかさかし	賢賢し			A	擬声語				
B	さびさびし	寂寂し			B	形容詞語幹	形容詞的意味要素を持つもの			
D	しかしかし	確確し			C	動詞連川形				
B	しらしらし	白白し	1004頃		D	名詞				
B	せきせきし	威威し			?	未定				
B	せつせつし	切切し		*						
B	せはせはし	忙忙し	1520頃							

表2 接尾辞による合成形容詞							
★接尾語「がまし・かまし」(50語)			★接尾語「らし」(29語)				
あいぎやうがまし	愛敬がまし	室町末	あいそうらし	愛そうらし	1603-1604		
あしあらがまし			あいそらし	愛そらし	1563		
あせがまし	江がまし		あいらし	愛らし	1283		
あつかまし	厚かまし	1667か	あはうらし	阿房らし			
あらかまし	荒かまし		いたいけらし	幼氣らし	1626頃		
あはれがまし	哀がまし	1477	おほせらしい	仰らしい	1603-04		
いたかがまし			をとこらし	男らし	1603-04		
うそがまし	嘘がまし		をなごらし	女らし	1603-04		
をこがまし	痴がまし	10C後	かはゆらし		1662		
をさながまし	幼がまし		ぎようらし		1603-04		
おそれがまし	恐がまし		げにもらし	実もらし			
おもひでがまし	思出がまし		さつつべらしい				
かかりがまし	懸がまし		さもとらし				
かぎりがまし	限がまし		じちらし	実らし	1603-04		
かどがまし	角がまし	1477	しゆつけらし	出家らし			
きつねがまし	狐がまし		しやうねらし	性根らし	1603-04		
きやくしんがまし	隔心がまし	1722	じんとうらしい	実頭らしい			
くちがまし	口がまし	1220	ぞくらし	俗らし	1603-04		
こしつがまし	故妻がまし		てうはふらし	調法らし			
こつがまし	骨がまし		つべらし				
ことがまし	言がまし		どくらし	毒らし			
ことがまし	事がまし		はからし		17C前		
さいかくがまし	才覚がまし		ひとらし	人らし	1604-08		
さいくがまし	細工がまし		ふんべつらし	分別し	室町末—近世初		
さうさがまし	造作がまし		まことらし	実らし	1595		
さしいでがまし	差出がまし		みすぼらし	身卑し	1477		
さしでがまし	差出がまし	1603-04	むさらし		1603-1604		
さたがまし	沙汰がまし		めんぼくらし	面目らし			
しれがまし	痴がまし		わらべらし	童らし	1595		
すずろがまし							
せせかまし		室町中	★接尾辞「めかし」(6語)				
ぞくがまし	俗がまし						
てがまし	手がまし	1603-04	あるめかし	有めかし			
とぎまがまし	外様がまし		いまめかし	今めかし	970-999頃		
なきけがまし	情がまし		いろめかし	色めかし			
ねだりがまし		室町末—近世初	さやうめかし	然様めかし			
はちがまし	恥がまし	10C後	さるめかし	然めかし			
はれがまし	晴がまし	1292頃か	なまめかし	生めかし	970-999頃		
ひじがまし	秘事がまし						
ひとがまし	人がまし	14C前	★接尾辞「らかし」(2語)				
ふんべつがまし	分別がまし	1603-04	じちらかし	実らかし			
ほねがまし	骨がまし	1563	しやうらかしい	性らかしい	室町末—近世初		
まことがまし	実がまし						
めだれがまし	口垂がまし		★接尾辞「がはし」(4語)				
めらうがまし	女郎がまし		かひがはし	甲斐がはし	1626頃		
めんぼくがまし	面目がまし		はちがはし	恥がはし	1435頃		
ものがまし	物がまし	1297-1350頃	みだりがはし	乱がはし	909		
ゆめがまし	夢がまし	1216頃か	みだれがはし	乱がはし	810-824		
やうがまし	様がまし	14C前					
わざとがまし	態とがまし	1001-14頃					

表3 室町時代編・シク活用合形成容詞（接尾辞を除く）									
A	あさすさまじ	朝冷まじ			A	はらあし	腹悪し		
B	あつくらはし	暑くらはし			?	はらだたし	腹立し	1896	
D	あひおなじ	相同じ			A	ひとおそろし	人恐し		
D	いくひさし	幾久し	1563		A	ひとこひし	人恋し	1500頃	
D	いやけし	弥怪し			D	まちおなじ	真同じ	1975	
D	いやめづらし	弥珍し			C	まちどほし	待遠し	1773	
D	いらひどし	苛酷し			C	まちびさし	待久し	1603-04	
B	うすかうばし	薄香し			D	まつぼなじ	貞同じ		
D	うそがなし	うそ悲し			C	みぐるし	見苦し	947-957頃	
D	うそすさまじ	うそ凄し			A	みみがしまし	耳喧し	1028-92頃	
D	うそはづかし	うそ恥し	1439頃		A	めはづかし	目恥し	1220頃か	
D	うつばづかし	打恥し			A	ものがなし	物悲し	8C後	*
A	うらがなし	心悲し	8C後	*	A	ものぐるはし	物狂し	974頃	
A	うらさびし	心寂し	905-914		A	ものさびし	物淋し	11C初か	
A	うらめづらし	心珍し			A	ものさわがし	物騒し	10C中	
B	うれしがなし	嬉悲し	室町末一近世初						
D	おくだのもし	奥煩し	1625						
D	おくゆかし	奥ゆかし	1001-14頃						
D	おほひさし	大久し							
A	おもきらはし	面嫌し							
B	おもしろをかし	面白をかし	室町末一近世初						
A	おもはづかし	面恥し							
C	おもひぐるし	思苦し		*					
D	かたはらさびし	傍寂し							
C	ききぐるし	聞苦し	1001-14頃						
A	くちをし	口惜し	9C末-10C初						
A	くちはづかし	口恥し							
C	くらべぐるし	比苦し							
A	こころいそがはし	心忙し							
A	こころうつくし	心愛し			A	名詞＋形容詞			
A	こころうれし	心嬉し	1592		B	形容詞＋形容詞			
A	こころぐるし	心苦し	8C後	*	C	動詞連用形＋形容詞			
A	こころすずし	心涼し	1310頃		D	接頭語（それに相当するもの）＋形容詞			
A	こころむつかし	心むつかし	1603-04		?	複合語の派生語など			
D	こさかし	小賢し	1115頃		*	上代編にも見出し語として収録されている			
D	こさびし	小寂し	1535頃						
D	こすさまじ	小凄じ	1535頃						
D	こすずし	小涼し	1919						
D	こたのし	小楽し	1458-60						
A	ことあし	事悪し							
A	ことあたらし	事新し	12C後						
A	こといそがはし	事忙し							
A	ことさびし	事寂し							
A	ことすさまじ	事凄し							
A	ことそうぞうし	事荒々し							
A	ことばさかし	言葉賢し							
A	ことむつかし	事むつかし	室町末一近世初						
A	ことめづらし	事珍し							
A	ことよろし	事宜し							
D	こむつかし								
D	こやさし								
A	さまあし	様悪し							
D	そこすさまじ	底寒じ							
D	そらはづかし	空恥し							
A	はなめづらし	花珍し	1603-04						